

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 11 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02082

研究課題名(和文) 啓蒙期から現代に至るカタストロフィの思想と表象に関する総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive Research on Philosophy and Representation of Catastrophe

研究代表者

西山 雄二 (NISHIYAMA, YUJI)

首都大学東京・人文科学研究科・准教授

研究者番号：30466817

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、とりわけ18世紀啓蒙期から近代産業化、21世紀現在に至るまでの文献(主に思想と表象)を系譜学的に辿り直し、批判的な考察を加えつつ、カタストロフィの概念の規定や解釈の比較、表象の分析を行った。また、こうした課題の探究を科学的客観知と当事者の主観的経験によって掘り下げるために、カタストロフィをめぐる社会科学・自然科学との学術連携を行い、カタストロフィの当事者の語りと記憶に哲学的考察を加えた。カタストロフィに関する思想と表象に関する共同研究の成果は、日本語・フランス語・英語で多数公表され(雑誌論文16件、図書12件)、学会発表(25件)も活発におこなわれた。

研究成果の概要(英文)：Our research achievements consist to analyze the concept, interpretation, representation of catastrophe. We traced the history of the documents on catastrophe (especially in philosophy and literature) from the 18th century to the present. In order to explore the problem of catastrophe, we tried to collaborate more effectively with scholars or researchers in social and natural science, and to deepen our consideration of narratives and memories of disaster victims. The research results were released in Japanese, French or English in many publications (16 articles, 12 books), at academic meetings (25 presentations).

研究分野：思想史

キーワード：カタストロフィ リスク 災厄

1. 研究開始当初の背景

フランス思想・文学研究に従事する応募者らは、「3.11」以後、独自にカタストロフィや震災の問題に関する予備的研究を続けてきた。西山は首都大学東京において共同研究「カタストロフィと人文学」を主宰し、同名の国際会議(パリ日本文化会館)を開催した。佐藤は原子力・放射能の問題に関する哲学的な考察を進め、シンポジウム「災害と文学」(東京大学)で発表を行った。田口は宇都宮大学多文化公共圏センターの福島乳幼児・妊産婦支援プロジェクト活動などを通じて震災当事者の支援に携わってきた。渡名喜は東洋大学国際哲学研究センター主催の連続講演会「ポスト福島哲学」に携わり、哲学者J-L・ナンシーの『フクシマの後で』の翻訳を行った。

東日本大震災後、自然科学や社会科学の分野では具体的な研究や提言が進められているが、文献学的方法に立脚する人文学からの研究はほとんど進んでいなかった。国内では文学作家・批評家らのエッセイ、研究者による論集やシンポジウム、商業誌の特集号などはあるが、本格的な学術研究はまだ不十分であった。他方、欧米においては、人文学に基づくカタストロフィ研究・災害研究・リスク研究が1980年代からかなり進展している。自然災害から産業事故、疫病や環境変動といった諸事象が検討され、「3.11」に対する分析も多い。だが、そうしたカタストロフィ研究の成果は未だ日本に紹介されていない。個別的な研究を進めてきた応募者4名は、日本での具体的な経験を基にした哲学的考察を長い歴史的視座で練り直し、既に蓄積されてきた国外の学術研究との接続を図ることで、人文学的なカタストロフィ研究を本格的に組織化すべきと考えるに至った。

2. 研究の目的

カタストロフィは、人間、自然、文明、歴史、進歩といった概念や現実の根本的な再考を促す歴史的契機である。本研究の目的は、主に人文学の文献や理論の検討、実地調査にもとづいて、カタストロフィと人間の関係を根本的に問うことにある。本研究で展開させるべき具体的な課題は以下の通りである。

カタストロフィに関する人文学的研究(主にカタストロフィの思想と表象の比較・分析)

カタストロフィをめぐる社会科学・自然科学との学術連携(主に哲学・倫理的問題の批判的考察)

カタストロフィの当事者の語りと記憶(当事者の経験の哲学的考察)

これら三つの課題に即して、本研究は第一に、カタストロフィと人間の関係を理論的に解明する。自然科学は個々の災害の物理的原因やメカニズムを、社会科学はその社会への

影響や相互関係を明らかにする。これに対して、人文学的研究は人間がカタストロフィをいかに解釈し思考し表象してきたのかを考察することで、人間と自然、人間と技術の在り方を根底的に問うことができる。第二に、本研究は、日本に十分に紹介されていない国内外(主に英語・仏語・独語圏)のカタストロフィ研究の成果を分析・整理する。第三に、先行研究の批判的検討を通じて、また他の学問分野との学術交流によって、カタストロフィの人文学的研究に理論的・実践的な広がりをもたせる。日本ではほぼ未成熟なカタストロフィの人文学的研究の視座や可能性を呈示することが本研究の最終的な目的である。

3. 研究の方法

本研究の主たる課題はカタストロフィに関する人文学的研究である。とりわけ18世紀啓蒙期から近代産業化、21世紀現在に至るまでの文献(主に思想と表象の専門分野)を系譜学的に辿り直し、批判的な考察を加えつつ、カタストロフィの概念の規定や解釈の比較、表象の分析を行った。また、課題の探究を科学的客観知と当事者の主観的経験によって掘り下げるために、カタストロフィをめぐる社会科学・自然科学との学術連携を行い、カタストロフィの当事者の語りと記憶に哲学的考察を加えた。

研究は東京での研究会とワークショップ、パリなどでの国際会議などを通じて実施された。国内・海外の研究機関・研究者と学際的に連携しつつ、カタストロフィをめぐる人文学的研究のネットワーク形成を目指した。

4. 研究成果

本研究では、これまでの人文学におけるカタストロフィ研究の進捗および布置を主に英語・仏語・独語文献を通じて調査し、批判的な考察を加えた。主に参照されるのは、思想(哲学、倫理学、科学哲学、社会思想史)

表象(文学、表象文化論、メディア研究)の分野である。カタストロフィに関する思想と表象に関する共同研究の成果は、日本語・フランス語・英語で多数公表され(雑誌論文16件、図書12件)、学会発表(25件)も活発におこなわれた。

(1) 佐藤嘉幸・田口卓臣『脱原発の哲学』
佐藤・田口は『脱原発の哲学』を刊行し、科学、技術、政治、経済、文学、歴史、環境といったさまざまな角度から、原発と核エネルギーの諸問題を哲学的に論じ切った。結論では、ヨナス、アンダース、デリダらの思想を援用しつつ、脱原発と脱被爆への切迫性を説き、日本の来たるべき民主主義への方途を描き出した。この画期的著作は大きな社会的影響を呼んだ。「ル・モンド」紙や「朝日新聞」「信濃毎日新聞」など各誌で好意的な書評が

発表された。関連する講演会や対談が多数実施された。2016年4月の国際会議「フクシマ後の例外状態」(日仏会館(東京))、2018年3月の国際会議「フクシマ以後いかなる哲学が可能か」(フライブルク(ドイツ))などである。本研究グループの主催でも、2016年11月、慶應義塾大学にて、小出裕章や岩田渉といった専門家を招聘して合評会をおこなった。また、2018年3月、パリの東洋言語文化大学にて、合評会をおこない、学術的交流・議論を深めることができた。数々の討論の集成は、『『脱原発の哲学』を読む』(読書人)として公刊された。

(2) *Rue Descartes* 誌・日本特集号

西山雄二の責任編集にて、国際哲学コレクションの定期刊行誌「デカルト通り」第88号で日本特集号「福島以後、今日の日本で哲学すること」が組まれた。日本・フランス・アメリカなど、各国の研究協力者との共同によって、とりわけ18世紀啓蒙期から近代産業化、21世紀現在に至るまでの文献を系譜学的に辿り直し、批判的な考察を加えつつ、カタストロフィの概念の規定や解釈の比較、表象の分析がおこなわれた。また、西山は英語単著 *Imagining an Abandoned Land, Listening to the Departed after Fukushima* を公刊した。

(3) 田口卓臣『原発避難と創発的支援』

田口は、原発避難の支援者(特に自治体、中間支援組織)の証言をまとめ、共著書として刊行した(『原発避難と創発的支援』本の泉社)。また、3.11の複合的カタストロフィの側面に着目し、伊勢真一監督のドキュメンタリー映画『傍(かたわら)』の映画評を執筆した(『21世紀を生きるためのドキュメンタリー映画カタログ』キネマ旬報)。また、カタストロフィとしての水俣病事件を描き続けた作家・石牟礼道子氏へのインタビュー記録『現代作家アーカイヴ2』を出版した。

(4) 渡名喜庸哲・森元庸介編『カタストロフからの哲学』

渡名喜庸哲は、『カタストロフからの哲学』を刊行し、現代フランスの思想家ジャン=ピエール・デュピュイの哲学をめぐって、現代文明の破綻を自覚した上で、知と行為のループをいかに再考すればいいのかを問うた。また、渡名喜は、ヴォルテール『カンディード』新訳に際して、論考「リスボン大震災に寄せる詩」から『カンディード』へ」を執筆し、カタストロフィ表象の論点をアクチュアルな視点で読み解いた。

(5) 日本語・フランス語・英語での学会発表

本研究グループの全員が国内外で日本語・フランス語・英語での学会発表を多数おこなった点は注目すべき成果である。中堅研究者によって組織される本研究は中長期的な展開

を目指し、双方向的な国際的な研究ネットワークの形成を目指してきた。

(6) 今後の課題

本研究は人文系の研究者で構成されているが、多様な要素からなるカタストロフィ研究には学際的連携が欠かせない。人文学系のカタストロフィ研究を確立すると同時に、自然科学・社会科学などの関連研究との交流はまだ展開の余地があるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 16 件)

田口卓臣、「島と海の彼方の表象——三島由紀夫の『潮騒』と『午後の曳航』」、『宇都宮大学国際学部研究論集』、査読無、45、2018、59-74。

Yuji NISHIYAMA, « L'adresse de l'entre-nous : l'interprétation plastique de Hegel chez Jean-Luc Nancy », *Les Cahiers philosophiques de Strasbourg*, 査読有, 42, 2017, 127-137.

渡名喜庸哲、「カタストロフ前夜のシモーヌ・ヴェイユ」、『別冊水声通信 シモーヌ・ヴェイユ』、査読無、2017、112-127。

Yotetsu Tonaki, "Günther Anders et le Japon. Penser le post-humain", *Europe*, 査読無, 1058-1059-1060, 2017, 267-280.

Yuji Nishiyama, « Philosophe au Japon aujourd'hui, après Fukushima », *Rue Descartes*, 査読有, 88, 2016, 1-7.

Yuji Nishiyama, « Imaginer la terre abandonnée, prêter l'oreille aux disparus après Fukushima », *Rue Descartes*, 査読有, 88, 2016, 8-31

Yotetsu Tonaki, "La banalité résiliente des catastrophes : d'Après Fukushima de Jean-Luc Nancy", *Rue Descartes*, 査読有, 88, 2016, 66-83

渡名喜庸哲、「ギュンター・アンダーズのヒロシマ 政治でも、道徳でも、ヒューマニズムでもなく」、『現代思想』、査読無、44-15、2016、96-108

渡名喜庸哲、「アンダースとアーレント 科学技術をめぐって」、『*Arendt Platz*』、査読無、1、2016、3-8。

田口卓臣、「容認に関する断片的考察」、『宇都宮大学国際学部研究論集』、査読無、41、

2016、179-187

〔学会発表〕(計 25 件)

Yoshiyuki Sato, Takumi Taguchi, “Injustice After the Accident at the Fukushima Nuclear Power Plant”, Symposium «What kind of philosophy is possible after Fukushima?», 2018.3.28, フライブルク (ドイツ)

Yotetsu Tonaki, "Seven years after Fukushima. Remaining/emerging problems", Symposium "What Kind of Philosophy is Possible After Fukushima?", 2018.3.28, フライブルク (ドイツ)

Yoshiyuki Sato, Takumi Taguchi, « Philosophie de la sortie du nucléaire », Table ronde « Philosophie de la sortie du nucléaire », 2018.3.27, パリ (フランス)

Yuji NISHIYAMA, « Hauntologie de Fukushima », Journée d'étude « La Catastrophe devant soi », 2018.3.26, パリ (フランス)

Yotetsu Tonaki, « Mais qui aurait vu la fin du monde ? Des catastrophes différées et la catastrophe accomplie », Journée d'étude « La Catastrophe devant soi », 2018.3.26, パリ (フランス)

Yoshiyuki Sato, Takumi Taguchi, “Freedom of Research After the Accident at the Fukushima Nuclear Power Plant”, International Forum «Freedom of Research Today : Conflicts, Practices, Prospects», 2017.11.16-18, パリ (フランス)

渡名喜庸哲, 「エロス、文学、災厄：バタイユ、レヴィナス、ナンシー」, ジョルジュ・バタイユ生誕 120 年記念国際シンポジウム, 2017.4.23, 東京 (日本)

Yuji Nishiyama, « Politiques du mensonge chez Derrida et Levinas », Colloque « DERRIDA-LEVINAS Une alliance en attente de politique », 2016.10.18, ローマ (イタリア)

Takumi TAGUCHI, Yoshiyuki SATO, L'idée de sortie du nucléaire et de « désirradiation », Journée d'étude « L'état d'exception après Fukushima : Société, politique, poétique », 2016.4.9, 東京 (日本)

Yuji Nishiyama, « L'adresse de l'entre-nous: l'interprétation plastique de Hegel chez Jean-Luc Nancy », Colloque international "Mutations - autour de Jean-Luc Nancy", 2015.11.20, (フランス)

Yoshiyuki Sato, « Production of the competitive subject : Foucault and Neoliberalism », International Forum : Subjects and Subjectivities in the Era of Neoliberal Globalisation, 2015.11.5, 上海 (中国)

〔図書〕(計 12 件)

佐藤嘉幸、田口卓臣、西山雄二、渡名喜庸哲ほか、読書人、『脱原発の哲学』を読む』, 2017, 213

佐藤嘉幸、廣瀬純、講談社、『三つの革命——ドゥルーズ＝ガタリの政治哲学』, 2017, 347

Yuji Nishiyama, Lambert, *Imagining an Abandoned Land, Listening to the Departed after Fukushima*, 2016, 100.

Yoshiyuki Sato, Cécile Default, *Penser avec Fukushima*, 2016, 304 (243-256).

田口卓臣、本の泉社、『原発避難と創発的支援——活かされた中越の災害対応経験』, 2016、216

佐藤嘉幸、田口卓臣、人文書院、『脱原発の哲学』, 2016, 466

田口卓臣、講談社、『怪物的思考 近代思想の転覆者デイドロ』, 2016、256

〔その他〕
ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究代表者
西山 雄二 (NISHIYAMA Yuji)
首都大学東京・人文科学研究科・准教授
研究者番号：30466817

(2)研究分担者
佐藤 吉幸 (SATO Yoshiyuki)
筑波大学・人文社会科学研究所・准教授
研究者番号：90420075

田口 卓臣 (TAGUCHI Takumi)
宇都宮大学・国際学部・准教授
研究者番号：60515881

渡名喜 庸哲 (TONAKI Yotetsu)
慶應義塾大学・商学部・准教授
研究者番号：40633540

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
なし